

鹿兒島（鶴丸）城跡について

1 鹿兒島城の歴史

鹿兒島（鶴丸）城は、初代薩摩藩主島津家久が、関ヶ原の合戦直後の慶長6（1601）年頃に築城を始め、慶長末（1615）年頃にほぼ完成したとされています。

城の正式な名称は「鹿兒島城」で、「鶴丸城」の呼称は、背後の城山の形が、鶴が舞っているように見え、鶴丸山と呼ばれたことに因むと、江戸時代後期の『三国名勝図会』には記されています。

本来の鹿兒島城は、背後の山城（上之山城）と麓の居館からなり、江戸時代前半の絵図では、山城部分の曲輪を本丸、二丸（二之丸）とし、麓の居館は、居所（居宅）と記しています。



明治初期の鹿兒島城（黎明館蔵 玉里島津家資料）

江戸時代を通じて藩政の中心を担ったのは麓の居館部分で、江戸時代後半には、現在黎明館がある三方を石垣と濠に囲まれた藩主の居館を本丸、その西側を二之丸と呼ぶようになりました。

また、天明5（1785）年から、8代藩主島津重豪により、二之丸の整備拡大が図られました。

その後、明治に入り、明治2（1869）年に知政所となり、明治4（1871）年の廃藩置県で12代藩主島津忠義が去るまで、270年余り島津氏の居城として、近世鹿兒島の発展の中心でしたが、本丸は明治6（1873）年の火災で、二之丸は明治10（1877）年の西南戦争で焼失しました。

明治中期以降は、居館跡に中学造士館、次いで第七高等学校造士館が設置され、戦後は、鹿兒島大学の文学部、次いで医学部がありましたが、昭和58（1983）年に黎明館が開館しました。現在、鹿兒島城跡の山城（城山）部分が国指定史跡及び天然記念物に、本丸部分の石垣などが県指定史跡となっています。

2 鹿兒島城の特色

① 館造り

鹿兒島城は、背後の山城（城山）と麓の館で構造されています。これは、島津氏が鎌倉時代から続く守護として、山城と館で構成される城館という武家の伝統や格式を重んじて築城したものです。

② 内枅形と御楼門跡

突進して来る敵を防ぐために、門の内側を直角に折り曲げた枅形を造っています。周囲の石垣は「切り込みはぎ」※1という手法で積み上げ、隅の部分は「算木積」※2の工法が用いられています。御楼門跡の礎石には、門の柱に巻いた金具の錆跡が残っています。

※1 築石（平石）の合端（築石どうしが接する部分）を削り、隙間の少ない石垣を積み上げる手法

※2 隅角部にかかる石垣の重量を左右に分散するため、直方体の石の小面と大面を積む方法

③ 石橋と濠

鹿兒島城は、県内では珍しい高石垣と濠が築かれた城郭です。石垣は水面から高さ7～8mで、約70度の直線的な宮勾配※3をとり、総延長は約500mです（石垣上部での計測）。

居館前の橋は、文化7（1810）年に薩摩藩から幕府へ、木橋から石橋への架け替え願いが提出され、今の姿になりました。

※3 下部は傾斜が緩く、上にあがるにしたがって傾斜が垂直に近づく石垣で、別名「武者返し」

④ 鬼門避け（隅欠）

県民交流センター側の石垣隅は、角を切り取った形になっています。これは、城の北東に当たる「鬼門」とみなし、その災厄を除こうとしたと考えられ、「隅欠」と呼ばれます。

⑤ 御角櫓跡

南西側の石垣の隅角部にあった南北21.6m、東西5.4mの櫓で、嘉永6（1853）年6月15日に、13代将軍徳川家定の御台所となる篤姫が、ここから祇園祭を見たとの記録があります。

鹿兒島（鶴丸）城跡における取組について

現在、鶴丸城跡では、石垣の保全整備や御楼門建設に向けた取組を実施しています。

1 「鶴丸城跡保全整備事業」について

(1) 事業の目的

県指定史跡「鶴丸城跡」（昭和28年指定）の石垣には、樹根の張り出しなど様々な要因により、部分的な孕み（はらみ）出しや隙間などが発生しています。

このため、順次、石垣の現況調査・測量・設計を実施した上で、修復工事を行い、その保全を図ることとしています。また、必要な埋蔵文化財発掘調査を実施しています。

(2) 事業対象箇所と内容

<御楼門部の石垣修復工事>

御楼門建設工事に先駆け、平成28年度に実施しました。

工事の主な内容は、

- ・ 石垣清掃の上、傷んだ石の表面処理や保存化学処理等による補修
- ・ 雨水や地下水の影響による石垣の劣化を防ぐため、排水溝等の機能回復

<その他箇所の保全整備>

御角櫓跡周辺、北御門部周辺の石垣保全を図るため、現在、石垣に影響を与える地下水位の継続的な計測、埋蔵文化財の発掘調査などを行っています。

<埋蔵文化財発掘調査>

保全しようとする対象箇所の現状に合わせ、石垣背面等の状況や城跡に広範囲に巡らされた排水溝の状況等を把握するための調査を実施しています。

2 「御楼門」及び「御角櫓」の建設について

鶴丸城の表玄関であり、明治6年の火災により焼失した御楼門の復元については、平成27年2月、県と民間の鶴丸城御楼門復元実行委員会とで「鶴丸城御楼門建設協議会」を設立し、「かごしま国体」が開催される2020年の3月までの完成を目指し、官民一体となって取り組んでいます。

昨年9月に建設工事を発注し、現在、使用する木材の製材・乾燥を行っています。

今年夏には現地で起工式を行い、また、工事の様子を県民や観光客が見学できるよう工夫することとしています。

<スケジュール>

| | |
|---------|------|
| 2017年9月 | 工事発注 |
| 2018年夏 | 起工 |
| 2019年夏 | 上棟 |
| 2020年3月 | 完成 |

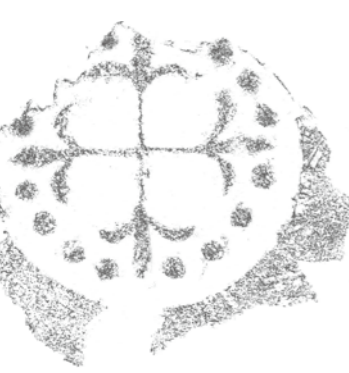
御角櫓の建設については、基礎部分となる石垣の修復を慎重に進める必要があるため、現在、継続的な地下水位調査等を実施しているところです。



御楼門完成イメージ図



工事期間中の見学者用通路（イメージ図）



① ごろうもん だんこん 御楼門と弾痕

発掘調査により土を除去した箇所は、御楼門再建に向けて、現代工法を用いずに古来からの工法で土を締め、より強い地盤になるように施工しました。確認された石垣の銃弾・砲弾痕は西南戦争の激戦を物語る重要な遺構です。石垣の破損箇所については銃弾・砲弾痕を後世へ残すために最低限の整備を行いました。



② はいすいこう いしがきうらご 排水溝と石垣裏込め

発掘調査で確認された排水溝と石垣は、埋め戻した後に新しい石材で復元整備を実施しました。また、江戸時代の排水溝の付け替えや近代以降に土管を排水溝に据え付けた痕跡などが確認され、長い間排水施設として利用された事がわかりました。石垣の背面には拳大の礫が充填された裏込め石が確認されました。



鹿児島（鶴丸）城

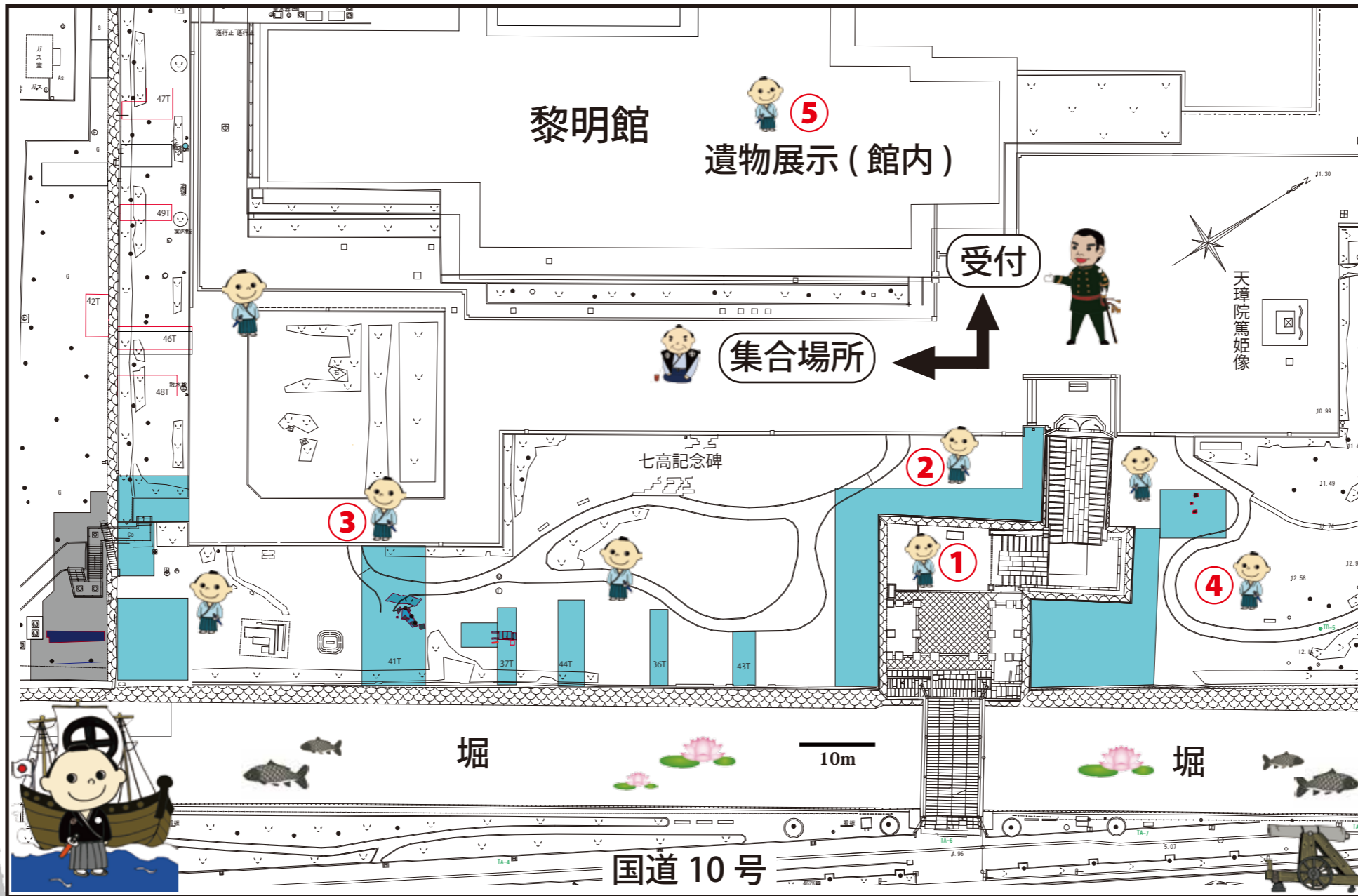


見学コースと見どころ



鹿児島（鶴丸）城の歴史

| 西暦 | 和暦 | 主なことから |
|-------|------|----------------------|
| 南北朝時代 | | 城山に、上山氏によって上山城が築かれる |
| 1600 | 慶長5 | 関ヶ原の戦い |
| 1601 | 慶長6 | 島津家久が鹿児島(鶴丸)城の築城を始める |
| 1604 | 慶長9 | 島津家久が内城から鹿児島城に移る |
| 1606 | 慶長11 | 居館正面の板橋の渡り初め |
| 1612 | 慶長17 | 御楼門の柱立 |
| 1639 | 寛永16 | 城内の屋敷の建て替え、石垣修復 |
| 1664 | 寛文4 | 鹿児島城南方の石垣2か所が崩壊 |
| 1696 | 元禄9 | 鹿児島城下で大火、城内に延焼し、本丸焼失 |
| 1707 | 宝永4 | 鹿児島城本丸再建工事終了 |
| 1773 | 安永2 | 藩校造士館・演武館が完成 |
| 1785 | 天明5 | 島津重豪、二ノ丸の整備拡大を始める |
| 1791 | 寛政3 | 二ノ丸の庭園を含む大工事が完了 |
| 1810 | 文化7 | 御楼門前の板橋を石橋に架け替える |
| 1843 | 天保14 | 御楼門の建て直し(1844年説有り) |
| 1863 | 文久3 | 薩英戦争、本丸大奥二階や御楼門に被弾 |
| 1871 | 明治4 | 廃藩置県、熊本鎮台第二分営が置かれる |
| 1872 | 明治5 | 明治天皇行幸 |
| 1873 | 明治6 | 鹿児島城本丸焼失 |
| 1877 | 明治10 | 西南戦争、二ノ丸焼失 |
| 1884 | 明治17 | (県立)中学造士館設立 |
| 1901 | 明治34 | (官営)第七高等学校造士館設立 |
| 1945 | 昭和20 | 空襲により校舎焼失、石垣の一部崩壊 |
| 1952 | 昭和27 | 鹿児島大学文学部焼失 |
| 1957 | 昭和32 | 鹿児島大学医学部鴨池より移転 |
| 1960 | 昭和35 | 石垣一部崩壊 |
| 1974 | 昭和49 | 鹿児島大学医学部宇宿へ移転 |
| 1978 | 昭和53 | 鹿児島城本丸発掘調査 |
| 1983 | 昭和58 | 黎明館開館 |
| 1999 | 平成11 | 御角櫓発掘調査、石垣修復 |
| 2014 | 平成26 | 鹿児島城発掘調査開始(～現在) |



③ ていえんじょういこう おすみやぐら 庭園状遺構と御角櫓

明治5年に明治天皇が鹿児島を訪れた際に、城の内外で写真が撮影されました。城内の写真には池や滝、立石など配置された庭園が写されています。発掘調査の結果、立石がそのまま埋没した事や、玉石などが確認され、庭園の一部が残存している可能性が高いことがわかりました。御角櫓は建物外壁の2辺は石垣上に、残り2辺は直方体の切石を並べた礎石の上に建っていました。礎石の一部が残存している事などが確認されました。



④ おひょうぐしょ はりばんしょ 御兵具所と張番所

御兵具所とは武具類を保管していたと考えられる多間櫓です。昨年度に発掘調査と復元整備を実施し、御兵具所の礎石や周囲を巡る排水溝が復元されました。絵図には御兵具所の西側に御兵具奉行張番所が描かれています。昭和53・54年に発掘調査を実施し、礎石の根石が確認されています。今年度の調査でも根石が東側へ続いている事が確認されました。



ロープ等で仕切られた立入禁止の場所には入らないでください。滑りやすい場所等がありますので、移動の際は十分注意してください。